

●脳科学・認知科学・心理学をベースした●

塾生の能力を最大限に引き出す科学的学習システム

フェイス学習システム

F a i t h E d u c a t i o n S y s t e m

弱点克服のプロセスと フェイスのコーチング指導

faith
個別指導塾フェイス

● 弱点克服のプロセスとフェイスのコーチング指導

弱点克服に限らず、どんな学習でも、

理解 ⇒ **定着**（記憶）⇒ **マスター**（使いこなせる）⇒ **成果**（成績アップや志望校合格）という段階を進みます。

どんなにすばらしい指導能力を持った教師や講師でも、教え、質問に答えるだけでは、学生に「理解」させることしかできません。

もちろん、理解しただけでは学習のプロセスは完了しません。

- 理解した内容を「定着」させるには「**理解した内容の反復**」
- 使いこなすまで「マスター」するには「**応用演習**」
- 成績アップや志望校合格などの「成果」をだすまでには「**自信を持つ**」

以上のことが、それぞれの段階に必要ですが、これらの行為は学生本人が行わなくてははいけません。



得意科目や興味・関心のある教科は、自主的に自然にこれらのことをできますが、**苦手教科に対して「反復」「応用演習」「自信を持つ」という行為は学生にとっては非常に荷が重たいものです。**

フェイスの個別指導では、学生本人が行わなくてははいけない「反復」「応用演習」「自信を持つ」などの行為を、**プロの講師が、きめ細やかなコーチング指導により自主的に行えるように誘導します。**

そのため、完全1対2の指導システムと一コマ90分の指導時間をとっています。

ご希望があれば、マンツーマン（完全1対1）の個別指導も可能です。

「学生」という呼称について： 学校教育法によれば、本資料内で使用している「学生」という呼称は、大学生、大学院生などの高等教育機関で学ぶ者を指します。また、中学や高校などの中等教育機関で学ぶ者を指す呼称は厳密に言えば「生徒」になります。つまり、法令的には、教えられる立場の学習者を「生徒」とし、自ら学び研究を行う学習者を「学生」としています。ただし、本資料は「自ら学ぶ学習者を育成する」ことを意図したものであるため、あえて、中学生、高校生を「学生」と呼称しております。

「理解」は誰にでもできる。 でも、「理解」しただけでは学習は完了しない。

理解

定着

マスター

成果

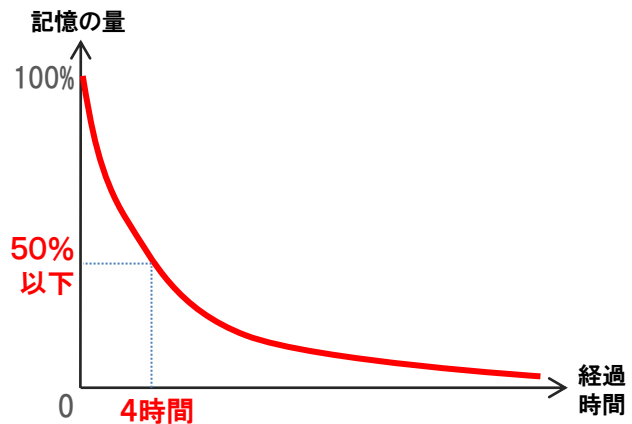
まず、学びのプロセスは「理解」から始まります。

最新の脳科学の研究成果によれば、
普通の人間の脳には機能的な個人差が無いことが判明しています。(*3-1)
実際、学習者のレベルよりも少し上の内容であれば、適切な指導者から説明を受けることにより、誰でもその内容を理解することができます。

ただし、**理解しただけでは学習は完了しません。**
理解した内容はそのままにしておくと脳の一時記憶の器官（海馬）から消えてなくなります。(*3-2)
（下図：エビングハウスの忘却曲線 参照）

この「忘れる」という機能も、全ての人の正常な脳の機能です。(*3-1)

■エビングハウスの忘却曲線 (*3-2)



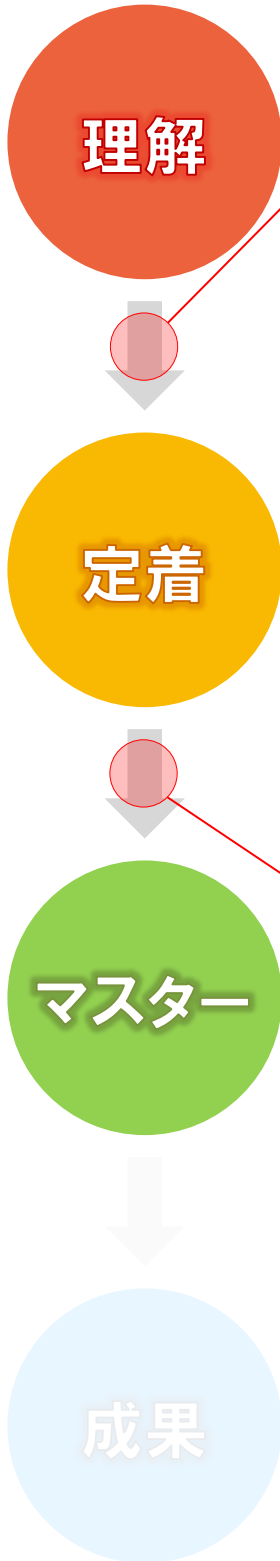
すべての人間の脳は忘れるようにできています。
記憶は学習後4時間で半分以下になります。

苦手な教科や、行われている授業の内容を理解することができない教科があることには原因があります。
それは、何らかの理由で授業を集中して聞くことができなかったか、前に履修した内容を理解しただけで定着以降のプロセスに至らなかったことが主な原因と考えられます。

参考・引用文献

- *3-1：「スーパー・ブレイン」 ルドルフ・E・タンジ、ディーバック・チョブラ共著 （監修 村上和雄／訳 大西英理子／保育社）
- *3-2：「学び」の認知科学事典 （監修 佐伯胖／編 渡辺信一／大修館書店）

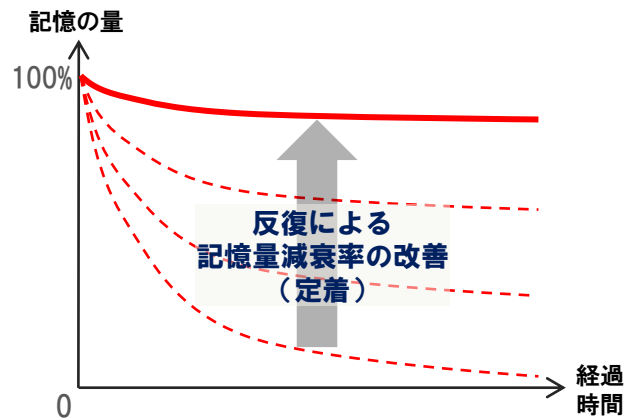
学びのプロセス完了には、 学習者本人が「反復する」「応用する」ことが不可欠



●【反復】 理解 ⇒ 定着

理解した内容を定着（記憶）させるためには、1週間以内に理解した内容を繰り返し復習し、脳内の一時記憶の器官（海馬）から長期記憶の器官（側頭葉）へ、理解した情報を移す必要があります。
また、脳は睡眠時に記憶を定着させるため、同じ情報を集中して記憶するよりも、日をおいて反復の方が効果的です。（*4-1）

■反復（復習）による記憶量減衰率の改善（定着）（*4-1）



理解した内容の反復によって、記憶量の減衰率（忘却率）が改善され、最終的には長期記憶になります。

●【応用】 定着 ⇒ マスター

さらに、定着した情報を、いつでも、どんな場面でも、意識せずに自由に引き出し使えるようになって初めて、その情報を使いこなせる（マスターした）状態になります。そのためには、定着させた情報を使用したさまざまな応用演習を行うことが必要です。

例として自転車の運転では、公園などの平坦な場所で乗れるようになっていても、それだけでは自転車の運転をマスターした状態とはいえません。

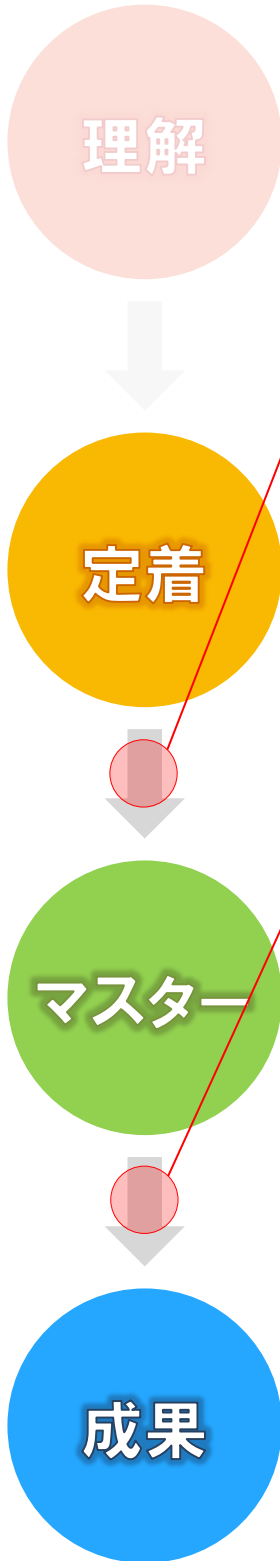
下り坂やデコボコ道など平坦ではない場所での運転を繰り返して初めて、意識せずに自由に乗りこなせるようになったはずです。

国語、英語や数学などの勉強も同じで、理解し定着させ、そして応用演習を繰り返して、その単元や教科をマスターできます。（次ページにつづく）

参考・引用文献

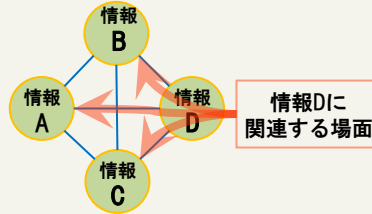
*4-1：「脳の学習力」S・J・ブレイクモア、U・フリス共著（訳 乾敏郎、山下博志、吉田千里／岩波書店）

学びのプロセス完了には、 学習者本人が「反復する」「応用する」「自信を持つ」ことが不可欠



●【応用】 定着 ⇒ マスター(つづき)

このマスターした状態になると、脳内のその能力に該当する細胞（ニューロン）同士を結ぶシナプスが増加、強化された状態になり、長期の手続き型記憶（単体の情報だけでなく情報同士を有機的に結びつける記憶：さまざまな場面で活用できる情報）になります。



マスターすると情報同士が脳の中で結びつきます。そのため、左図のように、情報Dに関連する場面でも、一見、関連性の無い情報A、B、Cの情報も活用できるようになります。この状態は、パターン認識、抽象化、概念化、類推、比喩、高度なジョークの創造や理解などの能力に関連すると考えられます。

●【自信】 マスター ⇒ 成果

通常、学習というと、物事をマスターする段階までを指しますが、**物事をマスターしても必ずしも成果に結びつくとは限りません。**(*5-1)

試験の前や後では簡単に答えが出せるのに試験中は頭が真っ白になって解答できなかった、という経験をしたことがあるのではないのでしょうか。

特に、センター試験や志望校の入学試験など本人にとって重要な試験ほどそういう現象が発生します。

これを被暗示性健忘（ひあんじせいけんぼう）と呼びます。健忘（物事を忘れること）だけでなく、ネガティブな暗示によって本来の能力が発揮できないことがよくあります。(*5-2)

逆にあんまり勉強しているようにはみえないのに模試での成績が良かったり、学校での成績以上の志望校にすんなり合格する学生もいます。

このような学生は例外なく根拠のない「自信」があり、「できて当然」「良い結果が出て当たり前」というポジティブな自己暗示を無意識に行っています。

つまり、暗示によって成果が変わるということです。具体的に言えば、自分で自分のことをどう思っているか、さらには、きたる将来にたいしてどう思っているか、**突き詰めれば「不安があるか」「自信があるか」によって成果が左右されます。**(*5-1) (*5-2)

しかし実際のところ、先に述べた「根拠のない自信を持っている学生」はごくわずかです。

普通の学生は、「反復する」「応用する」という忍耐を伴う行為を繰り返し、自分にうち克つことで、「自信」を持つようになり、結果、成果を出します。

参考・引用文献

*5-1：「スーパー・ブレイン」ルドルフ・E・タンジ、ディーバック・チョブラ共著（監修 村上和雄/訳 大西英理子/保育社）

*5-2：C. James Jensen 2012. Beyond the Power of Your Subconscious Mind Waterside Publications

学びのプロセスに大きな妨げとなる心理的な障害 ⇒ メンタル・ブロック

得意／苦手は「心」が原因

学習に必要な「理解した内容の反復」「応用演習」「自信を持つ」という行為は学生本人が行わなくてははいませんが、それらの行為には若干の忍耐と努力が必要です。そのため、心理的に学習対象にポジティブな意識を持っていればその忍耐と努力をあまり苦もなく行えますが、学習対象にネガティブな意識を持つ場合、それらの行為は非常に重荷になり、なかなか行動に移せません。

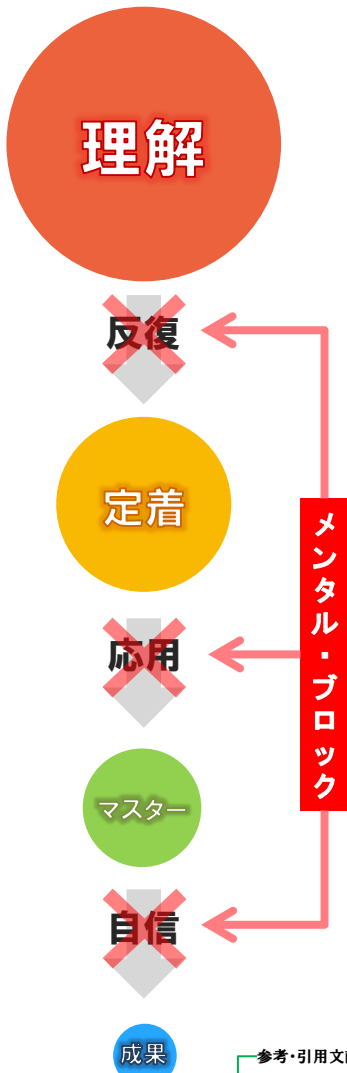
結果、心理的にポジティブな教科は得意教科になり、ネガティブな教科は苦手教科になります。さらに、学習そのものが苦手になる場合もあります。

潜在意識とメンタル・ブロック

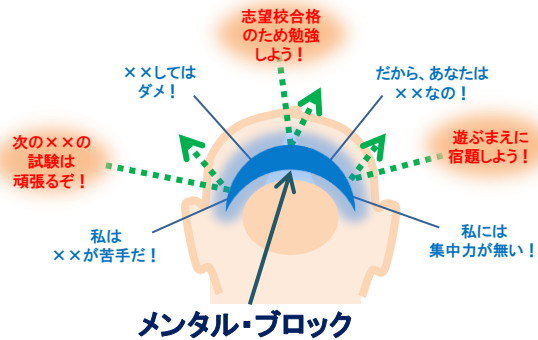
この心理的なポジティブ／ネガティブを決定しているのが潜在意識であり、ネガティブな要素を作り出しているのがメンタル・ブロックです。(*6-1)

学習に限らず、物事の好き／嫌いは、本人がその理由を明確に意識できていない場合がほとんどです。好きなものに「なぜ好きか？」嫌いなものに「なぜ嫌いなのか？」という質問に明確に答えることが人間はほとんどできません。例えば、キノコが嫌いな場合「美味しくないから」という理由もありますが、「なぜ美味しく感じないか？」という質問には明確に回答できません。理由は、自覚できない意識（潜在意識）がそれを決定しているためです。

実際、催眠療法などで意識に暗示をかけられた被験者は嫌いなものでも苦もなく食べることができます。(*6-2)



■メンタル・ブロック (*6-1)



メンタル・ブロック

環境や自らのネガティブな情報・発言・意識により、メンタル・ブロックが自然に形成されます。このメンタル・ブロックにより、失敗を恐れて、チャレンジできなかったり、努力を継続することができません。

参考・引用文献

- *6-1: 「メタ・コーチング」L・マイケル・ホール、ミッシェル・デュヴァル共著 (監修 田近秀敏/訳 佐藤志緒/VOICE)
- *6-2: C. James Jensen 2012. Beyond the Power of Your Subconscious Mind Waterside Publications

注: 「メンタルブロック」という言葉は厳密に言えば学術用語ではありません。

「メンタル・ブロック」という言葉は、心理学では「コア・ビリーフ」や「フレーム」という人間の感情や思考、言動を左右する潜在意識下の信念体系を指す学術用語が該当します。

*6-1の参考文献でも、「メンタル・ブロック」という用語を用いておらず、「フレーム」という用語を用いています。ただし、これらの心理学用語はあまり一般的ではありません。そのため、心理学での「信念体系」を、ビジネス・コーチングや人材マネジメントなど、企業で用いられている「人材育成/能力開発」の分野では「メンタルブロック」と呼称します。本資料もそれにならい、潜在意識下の「信念体系」を指す言葉として「メンタルブロック」という用語を用いました。

一般の学校や塾で行われているティーチングと質疑応答の限界 ⇒ 苦手教科はティーチングと質疑応答では対策が難しい

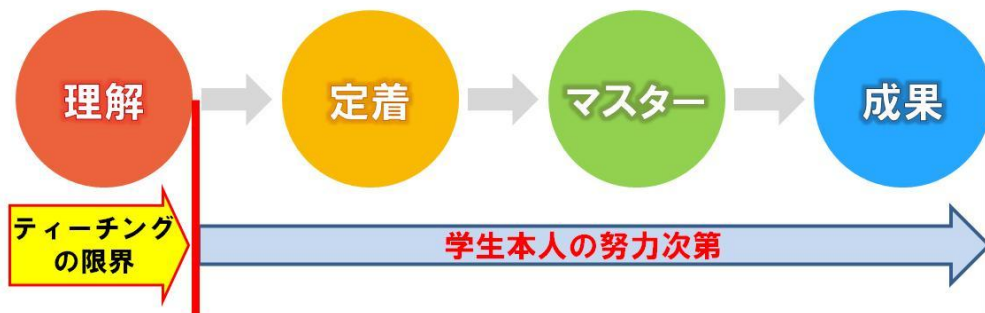
ティーチングと質疑応答の限界

一般の学校や塾では、教えること（ティーチング）と質疑応答（Q&A）が主に指導内容として実施されています。ティーチングとQ&Aは、**学生に学習対象を理解させることまではできます**。しかし、その学習内容を定着、マスターし、成果をだす、という学びのプロセスの完了までは、学生本人が自主的に行わなくてははいけません。

学校や塾ではその行為を促すために宿題、課題を出したり、休み明けテストや定期テスト、実力テストを行い学生のやる気を引き起こそうとします。これらのこと自体が問題ではありませんが、学生本人がその学習対象に興味・関心を持っている場合や得意なものである場合に効果があります。苦手意識のある教科や興味、関心のない教科には、あまり効果がないというのが実情でしょう。

もちろん教師・講師の問題ではありません。すばらしい教師・講師もいます。彼らは、熱意、意欲、前向きな態度、忍耐などの良質な人間性を自ら持ち、教科指導においても日々の生き方においても、その高い人間性を学生に示します。

それに触発され、学習対象に興味、関心を持つ学生もいます。ただし、1対多数というシステム上、全ての学生の心理的ケアを行うことは難しいものです。



興味、関心のある教科や得意な教科は、学校の教育システムで十分に学習プロセスを完了させることができると考えます。

もし、学校の指導レベルに問題があったとしても、安価なe-ラーニングシステム（インターネットを利用した学習システム、リクルート社の「受験サブリ」など）を利用すれば、良質なティーチングを受けることができ、

学生本人のやる気次第で相当高度な学力レベルに達することができるでしょう。

問題は、興味・関心のない教科、苦手な教科です。

興味、関心のない教科や苦手な教科については、先に述べた周囲や自らのネガティブな暗示によって作られたメンタル・ブロックを潜在意識の中に持っています。

そのため、なかなか自主的に学習を始め継続することができません。

さらに、本人も、周囲の人も、その原因や対処法を分かっていないのではないのでしょうか。

（潜在意識やメンタル・ブロックなどは、20世紀末ごろになってはじめて、その科学的研究が本格化したためです。）

また、受験における合否判定はほとんどの場合、総合点を判定基準にします。

得意教科の対策も重要ですが、得意教科はすでに高得点を取れているので、

いくら対策しても総合点には影響が少ないはずで。

特に受験においては、苦手教科を対策することが最も重要なことです。

あまり知られていない苦手教科克服の方法 ⇒ メンタル・ブロックの解消(1)

メンタル・ブロックの解消

潜在意識のメンタル・ブロック（いわゆる苦手意識）を解消することが、もともと、学習者が保有している学習対象に対する興味、関心を引き起こし、自己学習の継続を促す効果的な対処方法の一つになります。（*8-1）

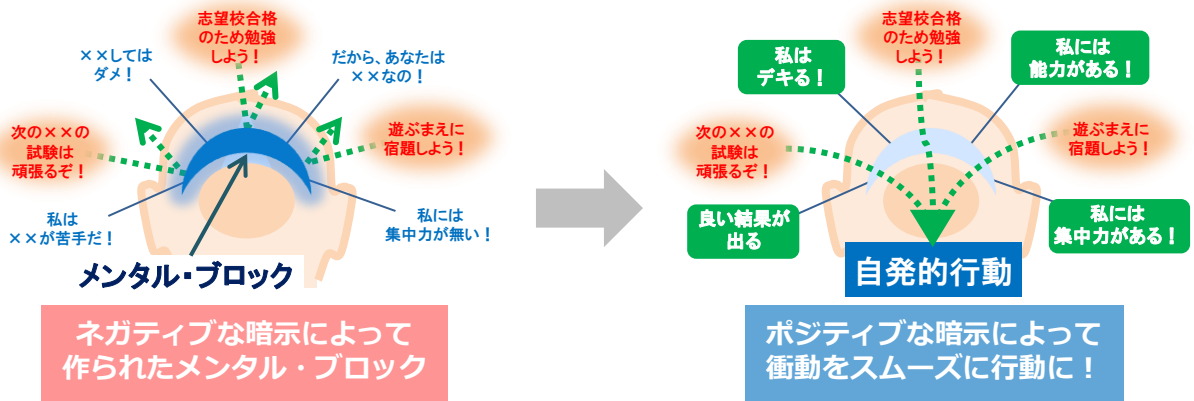
自己学習を継続させる最も効果のある対処法は、人生における有意義で高尚な目標・目的を持ち、自分はそれを実現する価値のある人間であることに信念を持つことです。しかし、第三者によってそのような目標・目的を与えることができず、中学時代、高校時代という短い期間で必ずしも成果がでるわけでもありませんので、ここでは割愛させていただきます。もちろん、当塾の指導のなかで、人生の目標・目的を持つことの重要性和それを探ることが大切であることを頻繁に学生にお伝えします。

メンタル・ブロックは、ネガティブな自己および周囲の人の暗示（できない、才能がない、良い結果が出せなかったらどうしよう、などの不安な思考や言葉）により形成されます。さらに思わしくない結果がでた場合それを強化します。

一方、メンタル・ブロックは、ポジティブな暗示（できる、能力がある、良い結果がでる、などの自信に満ちた思考や言葉）によって軽減できます。

さらに、努力によりできるようになるという経験を積み上げることにより、メンタル・ブロックはさらに弱くなり、最後には消滅します。（*8-2）

■メンタル・ブロックの解消



本来、人間には物事を学びそれをうまく行いたいという衝動があります。

メンタル・ブロックの解消によって、その学びの衝動を行動に移すことが非常にスムーズになります。

さらに、できなかったことができるようになったり、知らなかったことが分かるようになると、脳内にドーパミンやβ-エンドルフィンという神経伝達物質が生成されます。これらの神経伝達物質は喜びや幸福感という感情を促し強化するとともに、その時点でやっていた行為をより容易にできるように脳細胞（ニューロン）間のシナプス（脳細胞同士をつなぐ器官）を増強させます。これを「強化学習」と呼びます。（*8-1）

簡単にいうと、**学び、できるようになると、喜びや幸福感を感じるとともに、よりその能力が向上する、**という仕組みが脳内に誰にでも備わっているのです。

参考・引用文献

*8-1: 「スーパー・ブレイン」ルドルフ・E・タンジ、ディーバック・チョブラ共著（監修 村上和雄/訳 大西英理子/保育社）

*8-2: C. James Jensen 2012. Beyond the Power of Your Subconscious Mind Waterside Publications

あまり知られていない苦手教科克服の方法 ⇒ メンタル・ブロックの解消(2)

つまり、

- ある程度、メンタル・ブロックが解消されることで自己学習ができるようになる。
- 自己学習により、若干でも能力向上が実感できれば、脳は喜び・幸福感を感じる。
- 脳は、より大きな喜び・幸福感を求めるため、自然に自己学習への要求を高める。
- この自己学習と能力向上の実体験により、メンタルブロックがさらに弱まる。

という学習にとって、非常に好ましいサイクルが始まります。

「勉強は何のためにするか？」という疑問を持つ人やその疑問に明確に回答できない人もいますが、学び、成長すること自体が、その人の幸福を促すことになります。

つまり、幸せになるために人は学習するのです。

メンタルブロックを解消することがそのきっかけになります。

とはいえ、メンタル・ブロックは、そう簡単には解消できないのも事実です。

特に、中学生、高校生という若い方々が、実際に、思わしくない状況（テストの点が悪かったり、実際に理解できない状況など）に置かれた場合、その状況とは逆のポジティブな自己暗示を行うことはほとんどできないのではないのでしょうか。

そこで、新しい指導方法による第三者のサポートが必要になります。

個別指導による新しい指導方法(当塾でのアプローチ) ⇒ コーチング個別指導



●内発的モチベーションによる自己学習 ●努力の継続⇒自信

●共有

現状と目標および 自己学習の内容を共有する

フィードバックの内容（現在の状態）を塾生と共有するとともに、目標とこれから行う自己学習の内容（課題）を共有します。できる限り、塾生本人に目標と自己学習の内容を設定してもらい、自己責任を促します。

●フィードバック

以前との変化を塾生へ伝え、 自己学習（努力）を認める

観察し確認した内容（変化と対処方法）をフィードバックします。
必要な知識が不足している場合はティーチングを行い、能力が不足している場合は習得方法をお伝えしますが、フィードバックの要点は変化（以前との差）です。通常、1教科週1回の指導を行いますが、1週間の自己学習でもさまざまな点で改善された内容があります。その改善された内容を重点的にフィードバックします。
このフィードバックがメンタル・ブロックを解消します。

さらに、塾生本人もできなかったことができるようになったり、わからなかったことが分かるようになったことを実際に体験し、そのことを他者である講師から認知されることにより、よりポジティブな自己暗示を自然に行うこととなります。結果、学習の障害となるメンタル・ブロックがより弱くなります。
このフィードバックは「ほめて伸ばす」とことは異なります。入塾当初、学習に大きな障害のある場合は「ほめる」フィードバックを行いますが、むやみに「ほめる」ことは「ほめられたことしかなくなる」「満足してやらなくなる」ことが最近の研究で判明しており、一般に言われるほど効果はありません。
ここでのフィードバックは、あくまで改善内容と自己学習（努力）の認知です。

●アウトプット学習

自己学習の成果を講師の前で 実際に演習／説明する

例としては、英語、古文、漢文などの言語系では、実際に塾生に音読してもらい、現代語訳を講師の目の前で行っていただきます。現代文では、設題本文の作者の意図や小説の主人公の心情などを説明してもらいます。数学や物理、化学などの理系の教科では、講師の目の前で問題を解いてもらい、どういう意図で解いたかを説明してもらいます。
理解した内容を実際に行い、他者（ここでは講師）に説明することより、より学習効果が高まります。これを「アウトプット学習」といいます。

●観察

講師は、塾生の演習／説明を 評価・判断せずに観察する

講師は塾生が行う内容を観察し、学習対象に対する、塾生の考え方、思考の傾向、背景となる知識、実施するうえでの必要能力（論理力、類推力、計算力、抽象化力、パターン認識力）などを確認し、変化（以前との差）の確認と不足に対する対処方法を考えます。判断は一切しません。あくまで観察に徹します。むしろ塾生自身の結果に対する判断を確認する質問をします。
できた／できなかった、さらにその理由（主に自己学習の充足度合い）は塾生本人が一番理解しています。
（人は他者から判断されることを本質的に嫌悪します。特に教師／講師からの悪い判断は学習者の自主的な学習に著しい障害になります。）

● フェイスのコーチング個別指導(1)

コーチングとは

コーチングとは、「相手の個性や特質、モチベーションを引き出し、相手自身の目標達成に向けて自発的行動を促すコミュニケーション手法」のことです。

地動説で有名なガリレオ・ガリレイは

「人に教えることはできない。人が悟るように手助けすることはできる」と言いました。この言葉が、コーチングの趣意を表しています。

一般の学校や塾では、ティーチング（教えること）が主体です。

もちろん、当塾でもティーチング（教えること）をします。

ただし、それは、基本的な知識が欠けている場合であったり、学習を進めるうえで知る必要がある内容の場合、あるいは学生が質問してきたときに限ります。

ティーチングとコーチングとの違いは、強制的か自発的かの違いになります。

「こうすればうまくいきます」と答えを教えるのがティーチングで、「どうしたらうまくいくと思いますか？」と問いかけ考えてもらうことがコーチングになります。

中学から高校の教育の問題

中学校までの学習では、ティーチング（教えること）に比重をおくことが必要な場合もあります。

物事を考え、論理的に答えを導き出すためには、ある程度の基礎知識が絶対的に必要になるためです。

その基礎知識を植え込むのが中学校までの学習の主軸となっています。

しかし、高校での学習、さらには大学受験では、自らが考え、答えを導き出す能力が求められます。

中学までの学習で各教科の基本的な知識を身につけ、高校ではそれらを使って思考力や論理力を使った学習をしていく・・・

非常に理にかなった学習指導方針のように思えます。

ところが、高校に上がるまでの学校や塾でのティーチング（教えられること）にあまりにも慣れているために、実情、自発的に考えることができる学生があまり多くはいません。

「教えられること」が学習成果（成績）につながる小学生から中学生の頃を経験しているために、高校生になっても「教えられること」が学習成果（成績）につながるという意識が強いのです。

これは学習においての、致命的な勘違いです。（次ページにつづく）

● フェイスのコーチング個別指導(2)

中学校から高等学校の教育の問題 (つづき)

高校生に必要とされる学習上の能力には、計算力、読解力、論理力、思考力、表現力、類推力、抽象化力、パターン認識力、概念化能力などがあります。

これらの能力は、学生本人が、その能力を自ら繰り返し何度も使い達成感を味わうとともに、ときには失敗を経験し挫折を味わうといった、感情を伴った深いレベルでの刺激を脳に与えなければ十分な伸びは期待できません。

そのためには自己学習の十分な時間を確保する必要があります。

残念なことです、**ティーチング（教えること）をすればするほど、その学生の能力向上の貴重な時間をうばってしまうという皮肉な結果になってしまいます。**

特に学習塾では、学校で一通りの教科の履修を行っているわけですから、理解できていないところをティーチングする程度にとどめ、あとは能力強化のポイントを学生と共有し精神的な支えとなり、復習・演習をサポートしながら繰り返し行ってもらい、志望校合格に必要な能力を向上させていく、という考えが必要です。

フェイスのコーチング個別指導

個別指導塾フェイスの指導方法（コーチング・メソッド）は、

- 学生が考えて答えを出せるような質問を講師側から投げかける。
- 答えに至るための個々の考え方や論理を質問する。
- 個々の考えをしっかりと認めた上で、足りないところは補助する。

など、学生が自ら考え、答えを引き出す対話や演習を繰り返し、その学生の「潜在能力」を引き出し、「自分是可以する」という「自信」を持ってもらい、結果、望む目標をより確実に達成できるようサポートするコーチング手法です。

学生は、子どもの頃から、家庭や学校、塾で、教えられたとおりにできると、高い評価を得てきました。

特に近年、その傾向が強くなってきています。

しかし、それは「答えはいつも自分以外の誰かが持っている」という意識を持つことにもなります。

このようなありかたは、自ら考え、答えを引き出すという主体的な心構えや能力をもった学生や人材を求める「大学」や「社会」には、そぐわなくなっています。

- 「人は無限の可能性をもっている」
- 「その人が必要とする答えはその人の中にある」
- 「その答えに気付くためにはサポートが必要である」

この三つを軸に、

- 学生が「自分の人生は自分でデザインし創っていく」という意志と希望をもってもらい、
- そのために必要な、「自発的学習意欲」を引き出し、持続させ、
- 目標達成（志望校に合格することや将来の職業で成果を上げること）に必要な能力を開発する（引き出す）。

以上の指導方法がフェイスのコーチング個別指導です。

● 教育の目的／全人的アプローチ

教育の目的

教育の目的は、「**教育後も自ら学ぶことができる学習者を育成する**」ことにあります。

当塾は志望校進学を支援する進学塾ですから、やはり、教科指導が主軸になります。ただし、この教育の目的に根ざした指導を教科指導を通して行いたいと考えています。

志望校進学も一つの大きな目標ですが、長い人生においては通過点の一つにすぎません。社会では、さまざまなことを行う必要があります。得意なこともあれば苦手なこともあります。むしろ、苦手なことや興味、関心がないことを行うことの方が多いかもしれません。満足のいく人生をおくりたいと望むなら、苦手なことから逃げることはできません。さまざまな苦手なことを学びクリアし続けてはじめて、人生から充足を得られるのが人間です。そして、その過程を通して得た知恵や能力を自分よりも大きな存在（他者、家族、グループ、組織、社会）に活かすことが、その人のより豊かな幸福につながります。

当塾での「苦手教科を克服して志望校へ合格する」という経験が、塾生の満足のいく人生につながることを期待しています。

保護者の方へ

本資料でご説明したメンタル・ブロックは、学生にとって影響のある人からの暗示（意識、思考、言葉、態度）によって強化されます。

もちろん、学生本人の暗示が一番影響力がありますが、中学生、高校生の方に、周りに影響されずに前向きな自己暗示を行ってもらうことは非常に難しいものです。

苦手な教科に関しては学生本人が一番なんとか克服したいと思っています。しかし、その手段を知りません。残念ですが一般の学校や塾では、本資料で記載した全人的なアプローチ（教科指導だけでなく、学習者の精神面、心理面、思考の傾向、基本能力、環境などさまざまな角度からの対処）を行っているところは、あまり多くはないようです。そのため、学生本人もその対処方法を学んでいないようです。

苦手な教科に対して、学習が苦手な学生に対して、努力を促す発言を行っても効果がないことは科学的にも実証されており、保護者の方もどのように対処して良いかわからない、というのが本音だと思います。

教育における全人的なアプローチは、現在どんな状況であろうとも、その学習者の可能性のみに焦点をあて、その学習者に対して、「すでに可能性を実現した存在」として心の中で認め、言動を行うことではじめて、その効果が生まれます。

言い換えれば「愛を持って自立した存在として認め対応する」ことが前提になります。

ぜひ、当塾での指導効果を満足のいくものするために、保護者の方にも、目に見える状況がどのようなものであっても、「**愛を持って自立した存在として認め対応する**」ことを切にお願いします。

上述以外の参考・引用文献

- ・「コーチング・バイブル」ローラ・ウィットワース、キャレン・キムジーハウス、ヘンリー・キムジーハウス、フィル・サンダール共著（訳 CTIジャパン／東洋経済新報社）
- ・「NLPコーチング」ロバート・ディルツ 著（監修 田近秀敏／訳 佐藤志緒／ヴォイス）
- ・「図でわかる学習と発達の心理学」新井耕二郎 編著／福村出版
- ・「絶対役立つ教育心理学」藤田哲也 編著／ミネヴァ書房
- ・「人を伸ばす力―内発と自律のすすめ」エドワード・L・デシ、リチャード・フラスト 共著（訳 桜井茂男／新曜社）
- ・「目標管理の本質」五十嵐英憲 著／ダイヤモンド社
- ・「EQ こころの知能指数」ダニエル・ゴールマン 著（訳 土屋 京子／講談社）
- ・「モチベーション3.0」ダニエル・ピンク著（訳 大前研一／講談社）
- ・「ハイ・コンセプト」ダニエル・ピンク 著（訳 大前研一／三笠書房）
- ・「7つの習慣」スティーブン・R・コヴィー 著（訳 ジェームス・スキナー、川西茂／キングベアー出版）
- ・「第8の習慣」スティーブン・R・コヴィー 著（訳 フランクリン・コヴィー・ジャパン／キングベアー出版）
- ・Think and Grow Rich 1937, Napoleon Hill

個別指導フェイスの詳細内容の確認
お問い合わせ・資料請求・無料体験授業のお申し込み

☎ **082-568-8081**
www.faith-edu.com/



faith
個別指導塾フェイス